
新選組風雲伝～シュークリーム編～

kaji

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

新選組風雲伝〜シュークリーム編〜

【Nコード】

N3626H

【作者名】

k a j i

【あらすじ】

新選組局長近藤勇が書置きを残して脱走した。『シュークリームを食べられないなら私が隊にいる理由はない。私を探すものは問答無用で切り捨てるby近藤勇』シュークリームを巡って味方同士の戦いが始まる。注意某漫画なんかか魂をイメージすると面白さが半減すると思います。できれば映画や司馬遼太郎さんの小説の世界観をイメージしていただけると面白さがアップすると思います。

慶応2年のある日、壬生村の新選組屯所に激震が走った。

その日俺はヨーロッパ式の派祖痕はてこんで動画というものを楽しんでた。

「うーむ。このアップ主は才能の無駄使いをしているな。ぜひうちにも一人欲しい」

俺が動画を楽しんでいるところに外でバタバタと騒がしい音がしたかと思うと総司が障子をガラツと開けて入ってきた。

「はあ。はあ。土方さん大変です」

総司は美男子の顔を台無しにしてひどく慌てていた。ノックぐらいしろよと思ったがなんだが慌てているようなのでそこは指摘しないことにした。

2

「どうした？ お前が欲しがっていた刀が落札できなかったのか？
だから俺に任せろって言ったんだ。今なら格安で代行してやるぞ」
「そんなことはどうでもいいです！ とにかくこれを見てください」

俺は総司の手から紙切れを受け取り中を見た。

『シュークリームを食べられないなら私が隊にいる理由はない。私を探すものは問答無用で切り捨てる by近藤勇』

どうやら近藤さんの書置きらしい。それともいつもの近藤さんのおちやめな悪戯なのか俺には判断つかなかった。

「おい。総司。近藤さんはどうした？」

「朝に根津戸で話題の洋菓子店に行くって言って出ていったきり帰って来てないんですよ」

「あの話題の限定30個のシュークリームを買いに行ったのか！」

「総司なんでお前が並びに行かなかったんだ！」

「もう僕には女、子供と一緒にシュークリームを買うために並ぶことなんて耐えられなかったので今回は断ったんですよ。そうしたら近藤さん。逆切れしてもうお前には頼まんとか言って走って買いに行っただですよ」

「それでなんでこの書置きがあるんだ。シュークリームは買いに行っただろ？」

沖田総司はハンサムフェイスを苦々しく歪ませてため息をついた。

「それが目の前で売れきれで買えなかったらしいんですよ。帰ってきて『総司お前が買いに行かなかったから俺はシュークリームが食えなくなった。どうしてくれるんだ』と言って責められました」

「それでどうした？」

俺は近藤さんの病気がまた始まったと思って少タイライラして語尾が強まった。

「それで僕は明日、買いに行きますから許して下さいとお願いしたんですが『もいい。他の店のシュークリームをお取り寄せするか』と言って自分の部屋に引っ込んでいったんですよ。それでやけに静かだなと思って覗いてみたらこんな書置きが置いてあったんですよ」

と言って総司は近藤さんの書置きを片手でひらひらとさせた。俺は総司から書置きを奪い、証拠隠滅のために空中に紙を浮かばせて刀で切り刻んでやった。

「総司！ この件は内密に頼むぞ。局中法度に引つかかる恐れがある。我々だけで近藤さんを探すぞ」

俺と総司は他の者に気取られないように市中の見回りに行つて来ると言つて屯所から出た。俺は内心焦つていた。シュークリームが絡んだ近藤さんは本気だ。下手すると斬りあいになるかもしれない。俺は無意識に刀を握り締めていた。

近藤さんはすぐに見つかった普段からよく行つていた「洋菓子尊ようがしそん王攘夷のつじょうい」にいたからだ。なんとも挑戦的な店の名前なので普段より俺は近藤さんにこの店だけは行くのを控えてくださいとあれほど言つていたのだが近藤さんは懲りずに通つていた。

外から見える席で近藤さんはお気に入りのシュークリーム「坂本竜馬」を食べていた。以前近藤さんはこの外の皮とクリームの絶妙な一体感がたまらんとか言つていたがとにかく今はそんなことは言つていられなかった。

「総司！ 踏み込むぞ！」

「は！」

俺と総司は店に人気が無くなるの見計らつて踏み込んだ。

「御用改めでござる！」

店の者は驚いていたがそれを制して俺は近藤さんの所に行った。近藤さんは幸せそうにシュークリームをむさぼり食つていた。あれだけ派手に俺たちが突入したのにも関わらず近藤さんは全く我々の存在に気づいてないようだった。

「近藤さん……。そこまですよ」

俺はあえて冷ややかに言った。その声を聞いた近藤さんの振り返った時の表情は忘れられない。幸せから一変驚愕に変わったのだ。後に振り返るとあれは近藤さんの最後の至福の表情だったかも知れない。

「歳！ お前何しに来た！」

「何って市中見回りの途中でどこぞの局長がシュークリームを食ってるのが見えましたもんでね。御用改めさせてもらった所ですよ」

俺は近藤さんを見下ろして、冷たく言った。近藤さんはしばらく俯いていたが開き直ったのか手に持ったシュークリームを置いて立ち上がった。

「どうやら勝負は避けられんようだな。店の奥に來い！」

そう言うのと近藤さんは店の奥の方に向かって歩いていった。ここまですシュークリームは一人の人間を変えてしまうのかと思いい俺は愕然としていた。もしかしたら俺は死ぬかも知れない。こんなことなら誰かに俺が死んだら派祖痕ぱそこんを破壊してくれるようにと頼んでおくべきだったと心の中で後悔していた。

店の奥の部屋で局長と俺と沖田でのバトルロワイヤルが始まった。

「一度近藤さんとは勝負したかったですよ。まさかこんな形で勝負するとはおもいませんでしたけどね」

と総司。

「なかなかやるな。総司よ。この勝負は負けられん」

と近藤さん。

「よく。こんな甘ったるいものを食べられるな……。ぐふ。無念」

とシュークリームの甘さに耐えられずに倒れる俺。

結果は近藤さんの圧勝勝ちだった。俺は誓ったシュークリームは切らさないように用意しよう……。……。

なんとか甘ったるい口を我慢して俺は近藤さんに今後はシュークリームを朝、昼、晩用意いたしますのでと言った。

「ああ。後、おやつと食後にも頼む」

「……。承知しました」

近藤さんはさも当然といった感じで手にはお土産のシュークリームを持って意気揚々と歩き出した。

俺は新選組はもう長くないなとこの瞬間に実感した。

慶応4年1月 新選組鳥羽伏見で敗退

同年4月 近藤勇、斬首

同年5月 沖田総司 肺結核により死亡

明治2年5月 土方歳三戦死

近藤さんの墓には今でもその跡地にはシュークリームが供えられているとかいないとか。

終局

(後書き)

ご拝読ありがとうございます。

新選組コメデイ第2弾ということでもし局長がシュークリームに目がなかつたらという形で書かせていただきました。

またくだらないものを書いたんだなと暖かい目で見守っていただけるとうれしいです。

読んでいただけた方ありがとうございます。

またよろしくできましたらよろしく願いたします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3626h/>

新選組風雲伝～シュークリーム編～

2010年10月14日21時05分発行